■第53回企画展

消えゆく岩手の自然―生き物たちのメッセージ―

会期　10月23日(土)～12月19日(日)　　会場　特別展示室

豊かな自然に恵まれていると言われる岩手でも、多くの自然林が人工林に姿を変え、野生生物たちと共存してきた里山の環境も失われつつあります。いつの間にか、その姿を見ることができなくなった生き物も少なくありません。岩手県に生息し絶滅のおそれがある野生生物を記録した「いわてレッドデータブック」(2001年、岩手県)には、1000を超える種が掲載され、多くの野生生物が絶滅の危機に瀕していることが明らかになりました。本展では、これら岩手の貴重な動植物について紹介し、郷土の自然について考えます。

生物の絶滅

昨年秋、日本産トキの最後の１羽であった「キン」が死亡し、日本のトキが絶滅したと報じられたのは記憶に新しいところです。かつては岩手にもたくさんのトキがいたことが江戸時代の記録に残っていますが、乱獲によるトキの地域的な絶滅が日本各地で進行した明治期に、岩手のトキも同様に絶滅したと考えられています。一般に野生生物は、個体数が減少すると、互いに接触のない孤立した小集団に分かれていきますが、そのような小集団では、病気の流行や局地的な生息地破壊などの出来事が全滅に直結します。「ここにもあそこにも生き残っているから大丈夫」と思っていたらすべての集団が数年間で消滅した、ということも起こり得ます。日本のトキも、「キン」が最後の１羽となるずっと前、岩手をはじめ各地でトキの姿が消えていった時代に、すでに絶滅への過程は始まっていたと言えます。

この展覧会では始めに、トキのほか、ニホンカワウソ・ニホンオオカミなど、日本の絶滅生物のシンボルとも言える動物たちをはく製や写真等で紹介しつつ、生物の絶滅という現象について解説します。

消えゆく岩手の生き物たち

日本では主として、戦後経済成長期に始まる社会の様々な変化によって、多くの野生生物の生息環境が奪われ、絶滅へと追いやられてきたと言われています。自然が豊かだと言われる岩手県でも同様です。現在も多くの野生生物の個体数が減少し続け、絶滅の危機に瀕しており、前述の「いわてレッドデータブック」では、554種の植物、225種の昆虫、108種の鳥類など、あわせて1029種がリストに挙げられました。

この展覧会では、高山・森・里・湿地・海岸・川・草原の７つの景観をとりあげ、それぞれの環境に生息する野生生物の生態や現状について、絶滅危惧種を中心に紹介しています。本稿では、その中から里と草原の生き物について少しだけ御紹介しましょう。

タガメ

ゲンゴロウ

里の生きもの

「里」は、人が米作りを中心とする農業を営むことによって形成してきた景観です。雑木林、水田・あぜ、溜池(ため)と水路などが組み合わされ、生息する種の数では山奥の原生林に勝るとも劣らない、多様な生き物のすみかとなっていました。

タガメとゲンゴロウはかつては水田や溜池に普通に見られた水生昆虫ですが、宅地化、圃場(ほじょう)整備、農薬の影響などにより、今ではその姿を見ることは珍しくなってしまいました。特にタガメは、県内では南部にごくわずか生息しているのみで、近い将来の絶滅が心配されています。昔から人々が慣れ親しんできた里山の小動物達が、いつの間にか姿を消しつつあるのです。

かつては水田や溜池にはびこり、農作業のやっかいものだったため「水田雑草」と呼ばれていた水草たちも、除草剤の使用をきっかけに激減し、近年は圃場整備や休耕田の乾燥化、溜池の埋め立てなどによりさらに個体数が減っています。四ツ葉で「田の字」のように見えることからその名があるデンジソウは、昔はありふれた水草でしたが、現在生育が確認されているのは、県内ではただ１ヶ所のみとなってしまいました。ほかにもサンショウモ・ミズオオバコ・スブタなどの水草が、めったに見られない希少種となっており、このままでは岩手での絶滅は避けられません。

デンジソウ

サンショウモ

草原の生きもの

岩手では古くから馬の生産がさかんで、牧場（放牧地）や、まぐさ場（採草地）といった、シバやススキを主とする野草の草原が各地にありました。また、家畜の餌・田畑の緑肥・萱などを確保するためにも、野草地が利用されてきました。これらの草原は、放置すると灌木やアカマツなどが侵入し、次第に林に変化してしまうため、火入れや刈り取り作業を行うことによって維持管理されていました。

しかし、第二次世界大戦後、急ピッチで進められた人工林拡大と、畜産振興にともなう1960年頃からの人工牧草地の造成、耕地の拡大などにより、これらの野草地は急速に姿を消していきました。

かつての草原には、日当たりがよく乾燥したところを好む様々な植物が共存していました。その中には、オキナグサ・アツモリソウ・ムラサキ・タカサゴソウなど、今では極めて希少となった種も含まれています。これらは、野草地が減少するとともに個体数が激減しましたが、近年は園芸目的の盗掘が横行したため、絶滅へとさらに拍車がかかっています。

オキナグサ

ヤマキチョウ

オオルリシジミ

オオルリシジミは、翅を広げた時の幅（開張）が3.5㎝ほどで、光沢がある青色をした美しい蝶です。明るい草原を好み、かつては県内各地に生息していましたが、1960年代以降記録がなく、絶滅してしまったと考えられています。本展覧会では、1960年代に盛岡市内で採集された貴重な標本を展示します。

ヤマキチョウの生息地も草原であるため開発の犠牲となり、1970年代から急速に減少してしまいました。1980年代以降ほとんど採集記録がなく、すでに絶滅したのではないかと考える人もいます。

生き物たちのメッセージ

本展覧会では、さらに200種あまりの希少な生き物たちの生態を、貴重な標本や写真とともに紹介しています。めまぐるしく激しい社会の変化に流され、私たちが失ってきたもの、これから失おうとしているものは何でしょうか。それらは、失ってしまっても良いものなのでしょうか。岩手から姿を消そうとしている生き物たちの声に耳を傾け、本当の意味での「豊かな自然」を残すために、私たちに何ができるのか、展覧会を通して考えてみませんか。

（専門学芸調査員　鈴木まほろ）

関連行事

■文化講演会

11月３日（水・文化の日）　13:30～15:00

「岩手の自然環境と野生動物の現状」

講師　由井正敏氏（岩手県立大学教授）

会場　当館講堂　無料

■秋期博物館セミナー

「消えゆく岩手の自然」

各分野の専門家が岩手の動植物の現状や自然保護についてお話しする連続講座です。

各回とも13: 30～15: 30

会場　当館教室・講堂　無料　申込は不要

①10月31日（日）

「地域生態系の保全と博物館」

「岩手の水生昆虫と水環境」

②11月14日（日）

「岩手の絶滅に瀕する植物たち」

「岩手の自然とチョウ」

③11月28日（日）

「ウミツバメ類３種の繁殖地の現状」

「絶滅危惧種イヌワシの現状と将来」

④12月５日（日）

「岩手県産淡水魚類の現状と保全」

「岩手県のコウモリ類」

■展示解説会

当館学芸員が御案内します。

10月23日（土）・11月27日（土）・12月11日（土）

いずれも14:00～14:30